

長瀧重義氏の功績称え 叙勲記念祝賀会を開催

昨年秋の叙勲で瑞宝中綬章を受章した長瀧重義氏(東京工業大学名誉教授)の叙勲記念祝賀会が、2月25日、第一ホテル両国(墨田区)で開催された。



花束を受け取る長瀧重義氏



祝賀会には240名が参加した

長瀧重義氏は1937年生まれ(80歳)。1965年東京工業大学助教授、80年同教授、97年から同名誉教授。その後も新潟大学や愛知工業大学で学生を指導するなど一貫してコンクリートおよび鉄筋コンクリートの教育・研究に従事。

コンクリートの高性能化、高機能化を目指し、高強度化、早期強度化、高耐久性化、高流動化について顕著な業績を挙げて高く評価されている。

また自身の研究に関連して、セメントを始めとするコンクリートの各種構成材料から、レディミックストコンクリートまで広い範囲のJIS制定・改定の委員会を統括すると共に、永きにわたって土木技術専門委員会の委員長も務めてきた。こうした業績に対して、2002年に藍綬褒章を受章し昨年

11月、瑞宝中綬章を受章した。

叙勲記念祝賀会には東工大や新潟大の卒業生や大学教授、愛知工大の職員、交流のある

研究者、セメント、ゼネコン、混和剤、コンクリート、プレキャスト製品など幅広い分野から約240名が出席した。

祝賀会の開催にあたり発起人を代表して富田六郎氏(元太平洋セメント中央研究所所長)が挨拶し、出席者に対して感謝の言葉を述べると共に「昨年秋の叙勲で、長瀧先生が瑞宝中綬章を受章された。

先生に祝賀会の開催を提案したところ了解を得ることができ、長瀧研究室の7人が発起人となり準備を進めた。本日、会場には長瀧研究室の卒業生やコンクリート工学の研究者、コンクリート関連業界の皆さんなど約240名にお集まりいただいた。日頃から見知った皆さんが数多く集っており、是非先生と旧交を深めて思い出に残るパーティにして欲しい」と述べた。

乾杯の挨拶に立った岩波光保氏(東京工業大学教授)は「東工大といえども、昨年秋の叙勲で選ばれた日本人の教員は長瀧先生お一人だ。先生の業績が如何に卓越した素晴らしいものであるかを再認識した。また唯一の受章者が土木工

学の分野から選ばれたことは、長瀧先生の教え子の一人としてだけでなく、土木研究者としてもこの上ない喜びで、この場に居られることを非常に嬉しく思っている」と今回の長瀧氏の叙勲を称えた。

祝宴に移ると丸山久一氏(元JCI会長、長岡技術科学大学名誉教授)、上村克郎氏(元建築研究所所長)、前田又兵衛氏(元前田建設工業会長)、篠田佳男氏(日本コンクリート技術社長)が、長瀧氏の思い出やエピソードを交えながら祝辞を述べた。

さらに長瀧氏の長男、長瀧重博氏(理化学研究所副ディレクター)が「父は私が生まれた時には大学で教鞭を取っていた。ある時私が同席している場でお客様に対して、『息子が自分と同じ分野に進んでくれたら、研究のサポートもできるし良いと思うのだが』と語ったことを今でも覚えてる。結局私は宇宙物理の分野に進んだが、これだけの偉業を成し遂げた父親を仕事で意識せずに済んだという意味で、選択は正解だったのかも知れない。今でも現役で仕事を続けている父を尊敬している。先日傘寿のお祝いをしたが、楽しい時間を過ごす事ができて幸せに思うと同時に、これまで父と私たち家族を支えて下さった皆様に改めて感謝を申し上げます」と挨拶した。

この後、長瀧氏が出席者に対して謝辞を述べると共に「昨年11月

10日、国立劇場で文部科学省の伝達式で瑞宝中綬章が伝達された後、皇居に参内して天皇陛下に拝謁し、お言葉を頂いた」と報告。さらに自らの足跡をスライドで振り返り「私は1965年に東京工業大学に助教として着任し、学生を受け入れた。当時は建物を始め研究設備など何もない状態からのスタートだったが、それは逆の見方をすれば伝統や先達に拘束されず自由に研究テーマを選べる事にも繋がった。おかげで若さに任せて研究室の人達と、がむしゃらに研究することができた。家庭で食事をするのは日曜のみ、子供たちの教育も家内に任せっきりの毎日だった。しかし研究室の若い人達との連携が強まり、教育・研究の成果が上がるのと共に後継者も育ち、現在は北海道から九州まで20名を超える長瀧研究室の卒業生が大学の研究者として研究を続けており、他大学の教授から羨ましがられている。また企業においても研究畑を志望した卒業生が多く、学会の開催地では今でも研究室の卒業生と楽しく酒を酌み交わしながらの議論が続いている。このような研究環境を許していただいた東工大関係者並びに家族に改めてお礼を申し上げます」と述べた。

最後に加藤絵万氏(港湾空港技術研究所グループ長)がお祝いの花束を長瀧氏に贈呈した。